

## 第100回 イギリスのインド支配

### イギリス東インド会社によるインド征服

1765年には、**イギリス東インド会社はベンガル地方の徴税権を獲得**しました。**貿易会社が、他国の一地方の税金を徴収**するのです。もう、**貿易会社と言うより、統治機関**と言っていいでしょう。事実上、ベンガル地方を支配するようになったということです。**ベンガル地方というのは、現在のバングラデシュです。これ以後、インドはイギリス産業の原料供給地兼製品市場と**されていきました。

イギリス東インド会社はインドから木綿を買い付け、イギリス本国に輸出します。折からの産業革命で、発展しつつある綿織物工業の原材料です。そして、イギリスの機械制大工場で生産された綿織物が、今度はインドに輸出されます。**インドは世界有数の綿織物生産国でしたが、手工業だったので、イギリスから輸出される大量生産で安価な綿織物に対抗できません。この結果、インドの綿織物工業は大打撃を受けました。**「世界に冠たる織物の町」といわれたダッカの人口は、わずかのうちに15万から3万に激減しました。インド総督ベンティンクは、1834年にイギリス本国に送った年次報告に「世界経済史上、このような惨状に比すべきものはほとんど見いだせない。**職工たちの骨がインドの平原を白色に化している**」と書いたほどです。

お金とモノの流れを単純に考えてみると、**イギリス東インド会社は徴税権を持ち、インド人から税金をとる。その税金で、インド農民から原綿を買い付けると考えれば、ただで原料を手に入れている、もしくは奪っているのと同じこと**です。それを加工した製品をインド人に売るということは、つまり、**奪った原料で作った製品を、奪った相手に売りつけているわけで、富は一方向的にイギリスに流れること**になります。イギリス側にとって、これほど儲かる商売はないし、インド側からみれば、最大限搾り取られているわけです。

このあと、イギリスは、インド各地の地方政権を次々に支配下に置いていきます。インド征服のための大きな戦争としては、南インドのマイソール王国とのマイソール戦争（1767～99）、マラータ同盟とのマラータ戦争（1775～1818）、シク教国とのシク戦争（1845～49）があります。シク戦争の勝利で、イギリスによるインド征服は事実上完了しました。

### イギリス東インド会社によるインド支配

イギリス東インド会社が、インドを支配するようになって、インドは重い負担に苦しむようになりました。

まず、税負担があります。**イギリス東インド会社の徴税額**をみると（プリントの表を参照しながら）、1765年ベンガル太守時代には、82万ポンド。1770年東インド会社時代になると234万ポンド。1790年には340万ポンドと、**増加しつづけています**。別の資料によると、**東インド会社による地租（土地税）収奪は、1771年から72年にかけて234.2万ポンド**。これを指数100とすると、1821年から22年が1372.9万ポンドで、指数589。1856年から57年が1531.8万ポンドで指数654。こちらでも、**どんどん税額が増えている**。

**税を増やすだけでなく、東インド会社は、インド農民に高く売れる商品作物の栽培を強制**します。綿布の染料に使う藍や、麻葉アヘンの原料となるケシなどです。小麦など食糧をつくるべき畑で、食糧を作れない。食糧生産量は落ちる。藍やケシをいくら栽培しても、腹の足しにはならない。この結果、飢饉が増えます。

インド大飢饉回数の表があります。

18世紀 大飢饉3回 死者数不明

1800～25 大飢饉5回 死者100万人

1826～50 大飢饉2回 死者40万人

1851～75 大飢饉6回 死者500万人

1876～1900 大飢饉 18回 死者 1600万人

(「[世界史講義録](#)」)

筆者註：

インドは19世紀に2000万人以上が餓死。餓死に追いやった主体はイギリス東インド会社の所有者です。